イングランドから北海沿岸文化を訪ねよう

ヴァイキングの歩みとともに

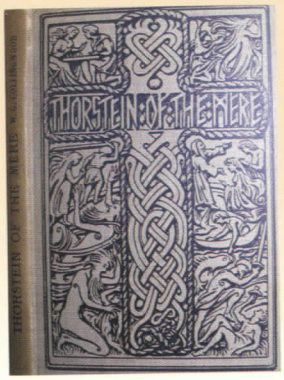
第3回 コリングウッドのアイスランド訪問

伊藤　盡 Ito Tsukusu（信州大学准教授）

ブラントウッドの書斎でのジョン・ラスキン
コリングウッド画

コリングウッド、ヨーン共訳『スカルド詩人コルマークルの生と死：コルマークルのサガ』タイトル

アイスランドポニーに乗るコリングウッド
アイスランドへの「巡礼」より



コリングウッド著『ミア湖のソルステイン』表紙

カンブリアからアイスランドへ向かう

前回、前々回見たように、W. S. カルヴァリーやW. G. コリングウッドら、カンブリアに住んだアーティスト兼研究者は、カンブリアに残されたアングロ・スカンディナヴィアのデザインを刻んだ石碑や十字架の復元デザイン画を描き、北欧の神話や伝説に興味を持つ人々の耳目を北イングランドに集めた。しかし、コリングウッドがオクスフォード大学卒業後、画家として身を立てようとするなかで、当時ばかりか今日まで英国画壇に影響を与え続ける批評家ジョン・ラスキンの秘書のような役割を担ったことは、どのように考えればよいだろうか。ラスキンは、1895年の夏に、ロンドンでジャーナリストとなったアイスランド人ヨーン・ステファンスソンの訪問を受けた際、「氷河や山脈の描写の研究から私がスイスに目を向けた2〜30年前に、もっとアイスランドのことをよく知っていたならば、アイスランドに行っていたはずだった」と述べたと言われる。コリングウッドのアイスランドへの興味はこのときに生まれたのだろうか。

湖水地方のブラントウッド（Brantwood）にあるラスキンの住まいでしばしば、ウォルター・スコットの小説からの一節を朗読しながら過ごす夕べを、コリングウッドは自らの著したラスキンの伝記の中で回想している。

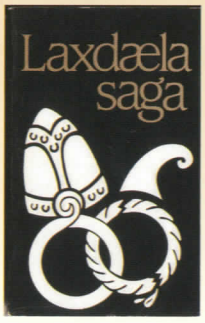
コリングウッドにはまた、スコットの歴史小説に影響を受け、アイスランドのサガ文学の文体を英語に翻案し、さらに地方誌家たちの書き物にも似せた一篇の小説がある。『ミア湖のソルステイン：湖水地方の北欧人たちのサガ』(1895年）と題された歴史小説である。主人公ソルステインは北欧から移住してきたヴァイキングのひとり、スヴェインの子であり、北欧人の慣習の中で育てられた。そこにイングランド人やゲールの民、山に棲む巨人などが登場する。この小説を貫くコリングウッドの考え方によれば、中世初期のカンブリアに移り住んだ北欧人たちは、イングランドという国を築いたアングル人と、カンブリアに元々いたケルト人の子孫とを融合することで独特の文化を持った社会を築き上げたのである。通俗的な英文学史には一切名前の出てこないこの傑作は、中世のアイスランドで口誦伝承から散文で写本に書き下されたサガ文学を模した文体によって物語られ、カンブリアとアイスランドとに共通する北欧文化と伝統の継承を読者の眼前に映し出した。コリングウッドは、後にこの考えをさらに推し進め、ヨーン・ステファンスソンとともに、アイスランド人のサガ

タイトルイラスト＝JUN ANIMATION

グンナルの農場フリーザレンディ　コリングウッド画

蛇舌グンロイグルの住んだギルスバッキの今日の農場のある風景

グズルーンが埋葬されたとされた場所、ヘルガフェッルにて
コリングウッド画



『ラクス谷のサガ』現代アイスランド語版表紙

ギルスバッキの際を流れるクヴィート川

の名作『コルマークルのサガ』を英訳する際、アイスランドのサガではKormakrと綴られる主人公の名前をアイルランド風にCormacと綴った。カンブリアと同じように、アイスランドにもケルトと北欧の融合が見られることを読者に伝えようとしたのである。

女傑グズルーンと英雄グンナル

コリングウッドは、1897年にヨーン・ステファンスソンとともにアイスランドの「サガ巡礼」を敢行する。約2カ月におよぶ長い滞在の中で、アイスランド人のサガが物語る舞台となった様々な土地を訪れ、コリングウッドが油彩や水彩でアイスランドの風景を描いていこうという趣向だった。

一介の女性でありながらアイスランドの歴史に名を残した、『ラクス谷のサガ』の女主人公「オースヴィーフルの娘グズルーン」(Guðrún Ósvífursdóttir)や、アイスランドの美しさを永遠に伝説化した『ニャールのサガ』の英雄「ハームンドルの息子グンナル」(Gunnar Hámundarson)の胸躍る物語の実在の舞台を確かめ、その特徴を記録せんとする企てであった。その時、グズルーンが埋葬されたと言われるヘルガフェッルの地面から人骨とともに飾り石を発掘したという。高貴な女性のしるしだった。コリングウッドは「わたしたちだけならばそんな挙に出ることはしなかったろうが、土地のアイスランド人はどんどん掘り起こし始めてしまったのだ」と日記に記している。

全アイスランド人のサガの登場人物の中でも、最も人気の高いグンナルの農地のあったフリーザレンディは、まさに「サガ巡礼」の目的地となる「メッカ」であった。英雄的で武人としても強く、かつ寛容な人物であったグンナルは、3年間の国外追放の判決を受ける。けれど、港へ向かう途上で振り返って見たフリーザレンディの美しさに打たれ、アイスランドから離れることを厭い、結果として法の庇護から離れた彼は敵によって殺害されることになってしまう。コリングウッドも、その「美しきアイスランドの風景」を一目見ようとしたのである。

蛇舌グンロイグルとイングランドの言葉

アイスランドという社会にあって重要な上記2つのサガの他にも、コリングウッドにとって、そしてこの連載の読者にとって興味深い人物を忘れずに記さねばならぬ。中世のアイスランドとイングランドとを結びつける、「蛇舌グンロイグル」と「禿のグリームルの息子エギル」という2人の傑出した人物が中

ボルクにある「息子を悼む詩」の記念碑

ボルク教区教会墓地にあるルーン碑文
遠景にはボルガルフィヨルドが見える

エギルの肖像
アイスランドの写本より

ボルク教区教会墓地にある、『ラクス谷のサガ』のキャルタンが眠ると記すルーン碑文
コリングウッド画

世アイスランドにはいた。2人ともアイスランド南西部のもっとも豊かな地域に住んでいた。

蛇舌グンロイグル（Gunlaugr Ǫrmstungu）は、今でも人の住むギルスバッキ（Gilsbakki）に住んでいた。近くには数多くの細い滝が流れこむクヴィート川（Hvítá、「白川」の意）が流れていた。蛇舌グンロイグルのサガには多くの学者の頭を悩ませた1つの有名な言説が残されている。グンロイグルはアイスランドの豪傑として、イングランド王エゼルレッドの宮廷を訪ねてロンドンにやって来たと言われる。恐らく1002年から03年の冬と考えられるが、その時彼はエゼルレッドを称える詩を古北欧語でつくって吟唱し、王から褒美として豪華な緋色のマントを下賜され、その冬の間、王に廷臣として仕えたという。「この当時のイングランドの言葉は、ノルウェーやデンマークの言葉と同じであった。だが、後にウィリアム庶子王が支配して、フランス語が大手をふるうようになり、英語は言葉が変わってしまったのだ」とサガは伝える。

1014年にはエゼルレッドはデンマーク王スヴェイン双髭王（Sveinn Tjúguskegg; Forkbeard; c.960-1014）とその息子クヌートル（Knútr；イングランド王 1016-1035）によって国外に亡命を余儀なくされる。このように北欧人による王位簒奪が可能だったのも、言語的に近かったからなのかも知れないが、果たして、本当に北欧人は、古英語の時代のイングランド人と同じ言葉を話していたのだろうか？　学者の説は様々であるが、現在では、口語レベルでの意思疎通は大いに可能であった、という考え方が優勢を占める。筆者もその考え方に同調しているけれど、この時代にイングランドに渡った北欧人の子孫が書き残したものの多くはルーン碑文でしか見られず、しかもそのほとんどは現在では失われてしまったと考えられる。現存する断片的な証拠の解釈による学説はなかなか一致をみないのも現実だ。

『エギルのサガ』に縁の地ボルク

そして「禿のグリームルの息子エギル」（c. 910- c.990）は、アイスランド人の中で最も有名なサガの1つである『エギルのサガ』の主人公である。彼はイングランドと北欧、アイスランドとの関係を語る上で、伝説の中で詳しく物語られたアイスランドの代表的な英雄だ。エギルとその兄ソーロールヴルは二人ともすぐれた戦士だったが、兄ソーロールヴルは美男子と

ルーン碑文　「ここに、オーラヴルの息子キャルタン眠る」と記されている

ボルクのあるボルガルフィヨルド

ボルク教区教会外観

ボルク教区教会の祭壇に飾られた
コリングウッドの描いたキリストの聖画

見なされた一方、エギルの方は父親譲りのいかめしい顔をしていたということだ。

ブリテン島全体の群雄割拠時代の中、イングランド王エゼルスタン（Æthelstan; 統治 924/5-939）は、スコットランドのコンスタンス王をはじめ、ウェールズの小王らと交渉し、自分の覇権を着々と築き上げるところだった。西暦 937 年、『アングロ・サクソン年代記』はブルナンブルフ（Brunanburh）において大きな戦闘があり、エゼルスタン率いる軍隊が、ダブリンに本拠を置くノルウェー人の王オーラヴル（Olaf）とスコット人の王コンスタンスの連合軍を破ったと記録し、その戦いの勝利を頭韻の英雄詩の形で称揚する。『エギルのサガ』は、その戦いで、エゼルスタン側に加勢したエギルの兄ソーロールヴルが戦死し、エギル本人がいかに素晴らしい武勲をたてたかを伝える。エギルは、当時ヨークの王としてしばらく君臨したエーリークル血斧王（Eiríkr Blóðøx; 統治 c.947-48, 952-54）の領地に入り込んでしまったことがある。宿敵エーリークル王に自分の命を請うて「首贖いの詩」（Hǫfuðlausinn）と呼ばれるエーリークルを称える詩を作って、その褒美として命を長らえたと伝えられている。エギルはイングランドから帰国するとボルク（Borg）にある自分の農場で穏やかな余生を送ったと言われるが、エギルが老年になったとき、嵐の海で息子ボズヴァルが命を落とすという事件が起きた。愛する息子を失い、悲しみに我を忘れる父を見た娘のひとりに促され、エギルは北欧の神オージンへの恨み言をまぶした頭韻詩を吟じると、その夜のうちに独りで息子を葬る塚を築いたという。今日のボルクには、息子を悼み、遺体を塚へと運ぶエギルの姿を描いた彫刻が記念碑として立っている。

また、ボルク教会の墓地には、『ラクス谷のサガ』のヒロイン、グズルーンの永遠の想い人であったキャルタン・オーラヴスソンが「ここに眠る」と記したルーン碑文が残されている。1858 年、ドイツの学者コンラッド・マウラーが発掘し、碑文の下に埋葬されているのは別人だと発見したが、今日でも人々はこの墓地のどこかにキャルタンが埋葬されていると信じている。そして、20 世紀にこの土地を訪れたコリングウッドは、自分を歓迎してくれた教区教会への感謝を込めた油彩を贈っている。瀟洒な教会の祭壇には今もその油彩画が飾られている。